

日本語の連用形転用名詞のアクセント変化 と英語のゼロ接尾辞分析について*

秋 孝 道

1. はじめに

本稿では、日本語の造語法とアクセント変化に関して、三宅（2011）が導出した一般化を概観し、この一般化と整合しないと三宅が結論づけた連用形転用名詞のアクセント変化を検討し直し、英語のゼロ接尾辞分析を援用して三宅の一般化と整合させる形で連用形転成名詞のアクセント変化を分析する可能性を追求する。なお、本稿で議論するのは、東京方言アクセントである。

2. 造語法とアクセント変化

造語法とアクセント変化の関係を確認するために、まず、「ナ」の語尾を持つ形容詞「ナ形容詞」と、「イ」の語尾を持つ形容詞「イ形容詞」のアクセント型を比較してみよう。なお、本稿では、アクセント核（音調下降）の位置を「|」で表記することにする。

- (1) a. てあらな
- b. こ | まかな
- c. やわ | らかな
- d. ちっちゃ | な (三宅 : 49-50)
- (2) a. てあら | い
- b. こまか | い
- c. やわらか | い

d. ちっちゃ | い¹

(三宅：49-50)

語尾を省いて観察すると分かるように、ナ形容詞は、そのアクセント型が基体のアクセント型と同一であるのに対し、イ形容詞は、基体のアクセント型に関係なく、そのアクセント核が語尾「イ」の直前に来る。

次に、行為を表す名詞に付加する語尾「スル」を持つ動詞（ここでは「スル動詞」と呼ぶ）と、名詞に付加する語尾「ル」を持つ動詞（ここでは「ル動詞」と呼ぶ）のアクセント型を見てみよう。²

(3)a. じしゅする

b. い | じする

c. けしよ | うする

d. せわ | する

(4)a. ひにく | する

b. じこ | する

c. トラブ | する

(三宅：52-53)

d. しけ | する (時化する)

(秋永 (2010 : 344))

スル動詞と基体の行為名詞を比較すると、スル動詞は基体のアクセント型を引き継いでいることが分かる。これに対して、ル動詞は、その基体（の元形式）のアクセント型に関係なく、そのアクセント核が「ル」の直前に生ずる。

ここで、三宅は、語尾「イ」「ル」と語尾「ナ」「スル」に関して、前者が低い造語力を持つ有標の語尾であるのに対し、後者が高い造語力を持つ無標の語尾であることに着目し、語形成とアクセント変化に関して次の一般化を提示している。³

(5) その語の品詞性を決定する際に有標の語尾が選択された場合は、その語尾の直前に核が置かれるアクセント型が要求され、無標の語尾の場合は、特定のアクセント型は要求されない。
(三宅：53-54)

上例において、有標の語尾「イ」「ル」が選択された(2)(4)では、語尾直前にアクセント核が置かれ、無標の語尾「ナ」「スル」が選択された(1)(3)では、基体のアクセント型が保持されている。

3. 日本語の連用形転用名詞のアクセント変化

よく知られているように、日本語では、語形を変えずに、和語動詞連用形を名詞に転用することができる。下記(6)が連用形で、(7)が転用名詞である。

- (6) a. いったんホテルに帰り、荷物を置いた。
b. 圏内をくまなく歩き、みてまわった。
(7) a. 学校からの帰りにコンビニによった。
b. 交通機関を使わず、歩きで通っている。 (三宅：55)

ここで着目したいのは、連用形と転用名詞のアクセント型の違いである。⁴

- (8) 連用形
a. か | えり
b. ある | き
(9) 転用名詞
a. かえり | (に)
b. あるき | (で)

(8 a) と (8 b) の連用形は、それぞれ、頭高型と中高型のアクセント型を持っているのに対し、(9 a) (9 b) の転用名詞は、尾高型のアクセント型を示す。また、例外的に尾高型アクセントを持つ「好く」「付く」などの動詞の転用名詞も、(9)の転用名詞と同じく尾高型アクセントを取ることが可能である。⁵

(10) 転用名詞

- a. 好きで共働きしているわけではない。 好き | で
- b. 付きがいい粘着テープがほしい。 つき | が

したがって、起伏式のアクセント型を持つ動詞連用形の転用名詞では、尾高型という特定のアクセント型が要求されると言うことができ、この事実を(5)の一般化と整合させて考察する可能性が生まれる。

この可能性に対して、三宅は否定的な立場を取り、その根拠として下記の主張を展開している。

- (11) a. 連用形と転用名詞の品詞決定は、語尾に依存していない。 (三宅：56)
- b. 連用形の名詞転用は、最もシンプルで高い造語力を持つ。 (三宅：54)

しかしながら、後者に関して、国広 (2002) は、この造語法で作られた語で確立しているものが膨大であることを認めながらも、転用名詞の単独使用が許されない場合があることを指摘している。

- (12) a. 別れ
- b. *会い
- (13) a. 今日は食いが良くない。(釣りの場面)
- b. *今日のお客さんは食べが良くない。
- (14) a. *会い
- b. 出会い
- (15) a. *刈り
- b. 草刈り (国広：77)

このような事実を考えると、名詞転用が前節でみた語尾「ナ」「スル」の付加と同じ程度に無標であるのかを、あるいは、「ナ」「スル」と同等に無標である名詞派生の他の造語法がないのかを、再検討することが必要となる。

ここで注目しなければならないのは、名詞化語尾と考えられる「ノ」である。この「ノ」による名詞化の用法は、極めて広範囲に観察される無標的用法であると言える。⁶

- (16) a. 売るのが下手だ。 うるの
 b. 帰るのがこわい。 か | えるの
 c. 歩くのに苦労した。 ある | くの
 d. 着くのが遅れた。 つく | の

「ノ」を省いて観察すると、(16 a)・(16 b)・(16 c) が、それぞれ、動詞から平板型・頭高型・中高型のアクセントを引き継いでおり、また、(16 d) では、例外的に尾高型になりうるアクセントが保持されることが分かる。すなわち、無標の語尾「ノ」が選択されている(16)では、特定のアクセント型は要求されておらず、この点で語尾「ノ」は(5)の三宅の一般化に従っていると言える。

このように考えると、連用形転用名詞は「ノ」語尾の名詞に比べてより有標的であり、連用形転用名詞を(5)の一般化に整合させて分析することを否定するために三宅が展開している(11 b)の主張は成り立たなくなる。そこで、次節では、まず、(11 a)の主張の妥当性を考える。

4. 英語の「ゼロ接辞」と日本語の連用形転用名詞の「ゼロ語尾」分析

三宅(2011:54)は、日本語の品詞性の決定が語尾に依存するのに対して、英語の品詞性の決定が語尾ではなくアクセント(下記例では下線部)の違いに依存する場合があると主張している。

- (17) a. contrast (動詞) / contrast (名詞)
 b. abstract (動詞) / abstract (名詞)

しかしながら、このような品詞交替には音形を持たない接辞「ゼロ接辞」の付

加が関与していると考えべき根拠が Allen (1978) によって提示されている。この根拠を見る前に、まず、英語の接辞体系について説明しておく。

英語には少なくとも2種類の派生接辞が存在することが Siegel (1974) などによって明らかにされている。これらは、音韻的影響力が強いクラス I 接辞と、それ以外のクラス II 接辞である。

(18) クラス I 接辞の例

- a. -ive (動詞に付加して形容詞を派生する)⁷
- b. -ity (形容詞に付加して名詞を派生する)
- c. -al (名詞に付加して形容詞を派生する)⁸

(19) クラス II 接辞の例

- a. -ment (動詞に付加して名詞を派生する)
- b. -ful (名詞に付加して形容詞を派生する)

また、この2種類の接辞の付加には、下記のような順序づけ条件が課されると考えられている。

- (20) In English, Class I affixation precedes Class II affixation. (Siegel: 152)
(英語においては、クラス I 接辞付加はクラス II 接辞付加に先行する)

動詞に付加して形容詞を派生するクラス I 接辞 -ive, 形容詞に付加して名詞を派生するクラス I 接辞 -ity, 名詞に付加して形容詞を派生するクラス I 接辞 -al, 名詞に付加して形容詞を派生するクラス II 接辞 -ful, そして動詞に付加して名詞を派生するクラス II 接辞 -ment の相互作用を見てみよう。

- (21) a. negat(e)-iv(e)-ity
 I I
 b. nation-al-ity
 I I

c. *hope-ful-ity

II I

d. *employ-ment-al⁹

II I

(21 a) (21 b) では、クラス I 接辞付加の後にクラス I 接辞付加がなされており、適格な派生語が生じている。これに対して、(21 c) (21 d) では、クラス II 接辞付加の後にクラス I 接辞付加が行われ(20)の条件の違反が起こっており、予測通り派生語は不適格となる。

以上のことを念頭において、ゼロ接辞付加を仮定する根拠を考えてみよう。

(22) a. contrast

b. abstract

(23) a. contrastive

b. abstractive

(24) a. *contrastal

b. *abstractal

上述のように、-ive は動詞に付加するクラス I 接辞であり、-al は名詞に付加するクラス I 接辞である。(23)のように、クラス I 接辞 -ive の付加は許されるが、クラス I 接辞 -al の付加は許されない。この事実は、クラス II 接辞のゼロ接辞が動詞に付加して名詞が派生すると仮定することによって明快に説明することができる。

(25) a. $[V \text{ contrast}] + \phi \rightarrow [N [V \text{ contrast}] \phi]$

II

b. $[V \text{ contrast}] + \text{-ive} \rightarrow [A [V \text{ contrast}] \text{-ive}]$

I

$$c. [N [v \text{ contrast}] \phi] + \text{-al} \rightarrow [A [N [v \text{ contrast}] \phi] - \text{al}]$$

II I

上記の仮定のもとでは、(25 b) では、クラス I 接辞の付加のみが起こっており何の問題も起こらないが、(25 c) では、クラス II 接辞付加の後にクラス I 接辞付加がなされており、(20)の条件の違反が生じており、(24)の派生語は不適格であるという正しい予測をすることが可能となる。

このゼロ接辞は、音形を持たないという点で例外的で、また、様々な他の動詞由来名詞を派生する非ゼロ形接辞に比べて極めて有標的な存在である。興味深いことに、日本語の有標語尾「イ」「ル」がアクセント核の移動を引き起こすのと同じように、英語の有標のゼロ接辞は強勢の移動を引き起こしている。

- (26) a. こ | まか
 b. こまか | い
- (27) a. ミ | ス
 b. ミス | る
- (28) a. contrast
 b. contrast + ϕ

以上の議論が成立するのであれば、連用形と転用名詞の品詞決定は語尾に依存していないという (11 a) の三宅の主張を退け、転用名詞にはゼロ語尾の付加が関与していると仮定し、日本語の連用形転用名詞の「ゼロ語尾」分析を提示することが可能になる。この分析は極めて簡明である。

日本語では連用形にゼロ語尾が付加して転用名詞が派生されると仮定してみよう。

- (29) a. [連用形 かえり] + ϕ → [転用名詞 [連用形 かえり] + ϕ]
 b. [連用形 あるき] + ϕ → [転用名詞 [連用形 あるき] + ϕ]

このゼロ語尾は、音形を持たない点で特殊であり、より造語力の高い名詞派生語尾「ノ」よりも相対的に有標的である。(5)の三宅の一般化に従えば、転用名詞のアクセント核はこのゼロ語尾の直前に置かれると予想される。

- ⑩ a. かえり | ϕ (に)
 b. あるき | ϕ (で)
 ⑪ a. かえり | (に)
 b. あるき | (で)

⑩の語構造では、アクセント核がゼロ語尾の直前にあるが、ゼロ語尾は音形を持たないので、音声的には⑪のようにアクセント型は尾高型となる。このように考えれば、(5)の三宅の一般化が連用形転用名詞にも当てはまると主張することが可能となる。

5. 終わりに

本稿では、ナ形容詞、イ形容詞、スル動詞、ル動詞とそれぞれのアクセント型に関して三宅(2011)が導出した(5)の一般化を概観し、連用形転用名詞がこの一般化に整合しないと結論づけるために三宅が提示した(11)の根拠に対し反論を行い、連用形転用名詞の派生にはゼロ語尾付加が関与していると仮定することによって、連用形転用名詞のアクセント変化に対して極めて簡明な分析を提示することができることを示した。

* 本稿を書くにあたって、多くの方々にお世話になった。まず、新潟大学の岡田祥平先生、三井正孝先生、東京大学の田中伸一先生、そして聖徳大学の佐藤直人先生に感謝の意を表したい。先生方の専門的な立場からのご意見は極めて有益なものであった。また、新潟大学の本間伸輔先生、土橋善仁先生、江畑冬生先生、磯貝淳一先生、東京理科大学の北田伸一先生にも、お礼を申し述べたい。先生方には、積極的に議論に加わって頂き、また日本語のインフォーマントとしても協

力して頂いた。筆者は、日本語音声学・音韻論の門外漢であることに加え、無アクセント地域出身であり、二重の意味で本稿の執筆は無謀であったかもしれない。言うまでもないが、本稿に不備があるとすれば、それは筆者の責任である。本稿は、科学研究費補助金基盤研究（C）（課題番号：24520535、研究代表者：秋孝道）と平成25年度人文社会・教育科学系研究支援経費（学系基幹研究、研究代表者：本間伸輔）のプロジェクトの研究成果である。

【注】

- 1 基体「ちっちゃ」は「ちっちゃだ」という形式を許さないで、完全なナ形容詞ではない（三宅：49-50）。
- 2 スル動詞とル動詞で共通に用いられる基体として「ミス」が挙げられるが、下記のように、(3)(4)と同じアクセント型を示す。

(i) ミ | スする

(ii) ミス | する

三宅は、スル動詞には統語的派生が関与するという理由で、スル動詞の詳しい考察を避けているが（三宅：51-52）、第3節で論ずるように、純粹に語彙的であるとは言えない語尾も考察することが重要であると考えられるので、スル動詞に関する検討も行う。

- 3 三宅は、(5)の一般化と英語の強勢移動による品詞交替の間に何らかの関係があると主張している（三宅：54）。しかしながら、第4節で議論するように、(5)の一般化と英語の強勢移動による品詞交替を直接的に関係づける分析を提示することができる。
- 4 三宅は、アクセント型の揺れが大きいことを指摘し、4モーラ以上の転用名詞を考察対象にしていない（三宅：55）。
- 5 無声化した母音にアクセント核が置かれることを避けるために、少数の動詞は例外的に尾高型になることがある。ご指摘くださった岡田祥平先生にお礼を申し述べたい。また、秋永（2010：付(8)）も参照。

平板型の連用形の転用名詞は、尾高型ではなく平板型のアクセント型を取る。

(i) a. 午前中はスケートリンクで遊び、午後はショッピングを楽しんだ。

b. 遊びにかかるお金は、自分で稼ぎなさい。

(ii) a. 試験中に隣の人から消しゴミを借り、試験監督に注意された。

b. いくつか借りを返してやる。

(iii) 連用形

a. あそび

b. かり

(iv) 転用名詞

a. あそび (に)

b. かり (を)

このことに関して、三宅は、「もともと平板型のものが名詞に転換されても、そのまま平板型というのは、当然と言えば当然のことであるので、特筆すべきことはない」と述べている(三宅:55)。しかしながら、日本語の有標語尾「イ」「ル」が付加する場合には、基体が平板型の場合を含めて、全ての場合で語尾の直前にアクセント核が置かれる。以下は、(2)(4)の再掲である。

(v) a. てあら | い

b. こまか | い

c. やわらか | い

d. ちっちゃ | い

(vi) a. ひにく | る

b. じこ | る

c. トラブ | る

d. しけ | る (時化る)

(a)・(b)・(c)・(d)の基体のアクセント型は、それぞれ平板型・頭高型・中高型・尾高型であるが、全てで語尾の直前にアクセント核が置かれている。

この問題は、今後の研究課題としたい。

6 「スル」と同様に、「ノ」も純粹に語彙的であるとは言えないかもしれない。しかしながら、連用形転用名詞の有標性を明らかにするためには、語尾「ノ」の用法とアクセント型を考察することが極めて重要である。

7 接辞 *-ive* が例外的に動詞以外に付加する場合 (*instinct-ive* など) がある。

8 動詞に付加して名詞を派生する *-al* (*arriv(e)-al* など) は、クラスII接辞に分類される。

9 Aronoff (1976: 54) は、例外として *governmental* と *developmental* が存在することを指摘している。*fundamental* などは、動詞由来でないので例外とはならない。

【引用文献】

- 秋永 一枝 (編) (2010) 『新明解日本語アクセント辞典 CD 付き』, 三省堂.
- Allen, Margaret (1978) *Morphological Investigations*, PhD diss. UConn.
- Aronoff, Mark (1976) *Word Formation in Generative Grammar*, MIT Press.
- 国広 哲弥 (2002) 「連用形転用名詞の新用法は異常か」, 『月刊言語』 31-9.
- 三宅 知宏 (2011) 『日本語研究のインターフェイス』, くろしお出版.
- Siegel, Dorothy (1974) *Topics in English Morphology*, PhD diss. MIT.